別紙１－１

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※　甲　　第　　号

氏　　名　　佃　瞳

論　文　題　目

タンザニアの中等学校におけるシティズンシップ教育
－アフリカ的共同体論に着目して－

論文審査担当者

主　査

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授　　服部美奈

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授　　松下晴彦

名古屋大学大学院教育発達科学研究科准教授　松本麻人

別紙１－２

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、タンザニアの中等学校におけるシティズンシップ教育をアフリカ的共同体論に着目して明らかにすることを目的としている。アフリカ地域を対象とした従来のシティズンシップ教育研究では、アフリカの文脈の不在という課題が指摘されつつも、そのための分析枠組みが充分検討されてこなかった。特にタンザニアでは、アフリカ社会を構成する共同体における行動規範や価値観が現在も重要な位置を占めていると指摘されているにもかかわらず、それらを考慮に入れたシティズンシップ教育研究はほとんど行われてこなかった。そのため本論文では、政治学や経済学、文化人類学など様々な分野で行われているアフリカにおける共同体の特質に関わる議論の総体を「アフリカ的共同体論」と位置づけ、シティズンシップ教育を分析する視点として用いている。

本論文の研究課題は以下の2点、つまり第一に、タンザニアの中等学校で形成されるシティズンシップ像を明らかにすること、第二に、アフリカ的共同体論という視点がタンザニアのシティズンシップ教育を分析する際の有用な視点となるかを明らかにすることである。ここで、「アフリカ的共同体論」とは、アフリカの人びとがさまざまな困難に直面する日々の生活の中で重視する共同性や互酬性にもとづく共同体での価値観や行動規範、さらに物事を人と人との関係性の中で全体的にとらえる認識についての議論を意味する。本論文は上記の研究課題を、タンザニア第一の都市、ダルエスサラームの公立中等学校での参与観察、関係者への聴き取り調査、および文献調査をもとに明らかにしている。

本論文は、序章と終章のほか、5章から構成される。

第1章では、歴史的な観点からタンザニアにおける近代学校教育の成立とシティズンシップ教育の実践が考察されている。考察を通して、各時期の学校教育には各時期に求められるシティズンシップ像が投影されていること、特にタンザニアの場合には村落共同体や宗教組織のほか、植民地政府、ニエレレ社会主義政党、そして構造調整後は国際機関などの多様なアクターがシティズンシップ教育に影響を与えてきたことが明らかにされている。

第2章では、中等学校で教えられる公民科目の教科書に焦点をあて、教科書に描かれるシティズンシップ像が考察されている。考察からは、第一に教科書では抽象的なシティズンシップの説明に留まる傾向があることが指摘されている。第二に、シティズンシップの説明では個人と共同体の責任や寛容の態度が強調されていること、さらに情緒的で共感的な論理が働いていることが指摘されている。特に、個人と共同体の責任や寛容の態度に関しては、アフリカ的共同体の価値観が、国家の社会保障機能の脆弱性や権威主義的政治体制を正当化するために利用されていることが明らかにされている。言い換えれば、アフリカ的共同体で強調される共同性と連帯の論理によって再解釈されたシティズンシップ理解が一部特徴的な箇所にみられることが指摘されている。

別紙１－２

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

第3章では、公民科目担当教員への聞き取り調査と授業観察を通じて、シティズンシップに対する教員の認識や、生徒によって経験され構築されるシティズンシップが考察されている。考察を通して、知識、態度、スキルの各側面で、国家と共同体との二重のシティズンシップが存在することが指摘されている。具体的には、多様な共同体におけるシティズンシップは互酬的な関係にもとづくものであるとされ、他者に共感を示す態度や陽気で居心地のよい雰囲気を作り出すコミュニケーション能力が期待されている。一方、国家との関係において市民は国家共同体の経済発展に貢献する責任を有するが、国家からの見返りや保障を含む市民的権利を求めてはならないというシティズンシップ認識が、語りや教育実践から明らかにされている。特に、マグフリ政権は再解釈されたアフリカ的共同体の価値観を前面に押し出し、それを利用することで自立自助を強調する新自由主義的な捉え方と、共同体の連帯を強調する捉え方の共存を成し遂げ、政権の権威主義的な体制を強化してきたことが考察されている。

第4章では、生徒会活動に焦点があてられている。生徒自治会 (Student Government) や生徒評議会 (Bazara, Student Council) と呼ばれる生徒会活動は、生徒同士の協働や交渉などの民主的な実践を伴う点でシティズンシップを経験する重要な場と捉えられる。教員と生徒への聞き取りと参与観察による考察からは、生徒会活動では限定的な民主主義の経験しか許されておらず、結果的に学校の権威主義的構造が維持・強化されていることが明らかにされている。一方、これらの課題を乗り越える試みとして着目した A 校の実践には、生徒が構築するシティズンシップの理解について示唆的な語りがみられたことが指摘されている。具体的には、生徒自治会は教師、生徒との間に互酬性に基づく関係を結び、階層的な関係を対等な関係へと近づける駆け引きを行っていたことが考察されている。さらに彼らの取り組みは、生徒個々人のスキルや態度・知識の育成を目指すシティズンシップ教育とは異なり、集団の中で首尾よく関係性を構築する「ウジャンジャ」的なシティズンシップであることが指摘されている。

第5章では、生徒による学校での自主的な相互扶助クラブの事例が考察されている。この事例は、学校という空間の中にみられる貧困や障がいをめぐる問題を公共の課題として捉え、解決を目指す実践であり、生徒会活動同様、シティズンシップを経験する重要な場と捉えられる。C 校で設立された相互扶助クラブの参与観察と生徒への聞き取り調査から、学校内でさまざまな困難に直面する生徒が、学校特有の梯子型情報伝達・問題解決体系や公的に認められた支援組織との関わりを最小限のリスクで避けつつ、「共食」と類似した活動を新たに開始していたことが明らかにされている。相互扶助クラブは、生徒が少額のお金や余剰物を持ち寄り分け合うという資源の再配分を試みる取り組みであると同時に生徒による討議の場であり、帰属意識形成の場でもあったことが指摘されている。その際、消費の共同体における

別紙１－２

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

「共食」に類似した方法が採用され、分け合い、つながるという方法によるシティズンシップが形成されていたことが明らかにされている。

終章では、本論文の結論の一つとして、タンザニアの学校教育におけるシティズンシップの3つの特徴、つまり、① 生活を成り立たせるための戦略的、合理的な互酬性を伴う相互行為の結果としてのシティズンシップ、② コンヴィヴィアルな状態の維持を優先するシティズンシップ、③ 創造されたアフリカ的共同体の価値観を反映したシティズンシップが導き出されている。同時に、本論文では、アフリカ的共同体論という視点を導入したことにより、タンザニアの文脈をふまえたシティズンシップの分析が可能になったことが確認された。この視点の導入により、タンザニアの中等学校におけるシティズンシップの学びは、単なる個人の能力や知識・態度の問題に留まらず、互酬的な関係やコンヴィヴィアルな状態のなかで構築されるものであるという結論に到達している。さらに、タンザニア社会における学校の意味づけに関して、学校がタンザニア社会の中での生活を支えるアフリカ的共同体として新たな役割をはたしているという、学校に対する従来の捉え方とは異なる新たな知見が提示されている。

本論文の特色と学術的意義は、以下の点である。

(1)アフリカ地域を対象とした従来のシティズンシップ教育研究では、アフリカの文脈の不在という課題が指摘されつつも、そのための分析枠組みが充分検討されてこなかった。本論文は、「アフリカ的共同体論」という視点を用い、フィールドワークを駆使することにより、タンザニアのシティズンシップ教育を分析している点に独創性がみられる。

(2)アフリカのシティズンシップ、シティズンシップ教育に関する政治学、経済学、人類学を含む多分野にわたる国内外の議論を丁寧に整理し、先行研究の蓄積を充分にふまえた上で、「アフリカ的共同体論」が論じられている。

(3)現地での丹念なフィールドワークを通してのみ得られる貴重な一次資料や関係者へのインタビューを通してオリジナリティに富んだ考察が行われている。

(4)タンザニアの学校教育におけるシティズンシップの3つの特徴を、「互酬性」「相互行為」「コンヴィヴィアリティ」「創造されたアフリカ的共同体の価値観」など鍵となる概念を用いて導き出している。

(5)タンザニアにおけるシティズンシップの学びが、単なる個人の能力や知識・態度の問題に留まらず、互酬的な関係やコンヴィヴィアルな状態のなかで構築されるものであるという結論に到達している。

(6)タンザニア社会における学校の意味づけに関して、学校がタンザニア社会の中での生活を支えるアフリカ的共同体として新たな役割をはたしているという、学校に対する従来の捉え方とは異なる新たな知見が提示されている。つまり、多くの先行研究において、タ

別紙１－２

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

ンザニアの学校は、これまで主に知識やスキル・態度の教授の場として捉えられてきたが、本論文を通して、日々の不安定で困難な生活を生きぬくタンザニアの人々が、学校という場を共同体のひとつとして認識し、それを活用する諸相が確認されている。

本論文に対して、審査委員からは以下のような疑問点と指摘がなされた。

(1) 学校を共同体として捉える視点は大変興味深い。しかし一般化には留保が必要ではないか。たとえば、学校で形成される共同体は、コミュニティの共同体から一定の距離をとることができる都市部の学校の特徴ではないか。都市部と農村部における共同体としての学校の位置づけに違いがあるのではないか。その意味でさらに深く学校を取り巻くローカルな文脈を捉えるべきではないか。

(2) 本論文のスタンスとして、今後のシティズンシップ教育の可能性（意図的、教育的営みとしてのシティズンシップ教育）を示唆するものであるのか、あるいは人類学的な記述そのものから浮かび上がる現象の解釈を提示するものであるのか。

(3) ニャムンジョの議論はアフリカ全体のものであり、タンザニアに限定されたものではない。今後、アフリカ各風土におけるシティズンシップの再解釈のより詳細な分析を行うのか（たとえばタンザニア的コミュニタリズムの解明など）、あるいはアフリカ的共同体の解明をめざすのか。

(4) シティズンシップの多様性についてどのように考えるか。タンザニアの多様性とシティズンシップがどのように関係しているのか。

(5) シティズンシップ教育の再解釈ができている学校とその他の学校との違いは何か。各学校が有する学校文化や生徒・教員の個人的な資質が関係しているのか。

(6) アフリカ的共同体論は、シティズンシップ教育を分析する上でアフリカの他の地域にも適用可能か。

審査委員からのこれらの指摘に対し、博士学位申請者は研究の限界や課題についても十分に認識しており、質疑に対する回答も適切かつ妥当なものであった。また、指摘された課題は、今後の研究によって対処していくことが可能であるとした。

以上の結果を総合し、審査委員は全員一致して、本論文を博士（教育学）の学位に値するものと判断し、論文審査の結果を「可」と判定した。